

日本語応答詞の関連性モダリティ

著者	河野 武
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	49
ページ	240-225
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006422/

日本語応答詞の関連性モダリティ

河 野 武

【キーワード】 応答詞, モダリティ, 関連性, イントネーション, 感情

0. 序

応答詞は様々な感情を表す間投詞の下位類を成し、相手の発話への応答や発話場面への反応を表す (Ameka (1992), Bolinger (1989), Goffman (1981), 河野 (近刊) 等を参照)。日本語の応答詞は大きく分けて、「うん」・「はい」・「そう」のような肯定的応答詞と「ううん」・「いいえ」・「いや」のような否定的応答詞の二類がある。もっとも単純な場合、応答詞はそれのみで発話を形成する。次の例を見てみたい。

(1) A: ワインは好きですか?

B1: うん／はい／そう。

B2: ううん／いいえ／いや。

しかし、次に示すようなもっと込み入った表現形式では、応答詞は命題とモダリティから成る主発話 (主文) と共起する。なお、ここでは応答詞は肯定形で代表して示しておく。

(2) A: 彼はえり好みの激しいやつだ。

B1: うん／はい／そう、分かった。

B2: うん／はい／そう、知ってる／知らなかった。

B3: うん／はい／そう、そうなんだ！／そう(だ)。

B4: うん／はい／そう、そうなのか。

B5: うん／はい／そう、そうなの？

主発話は (2B1) では事態 (=情報) の認知行為 (つまりは理解の成立) を表し、(2B2) では未知・既知に関わる認知的位置づけを表し、(2B3)～(2B5) は順に〈事実の〉〈認定〉・〈納得〉・〈疑念〉等の発話態度を表している (河野 (2013) を参照)。注意したいのは、主発話は応答詞の余剰なパラフレーズではなく、固有の機能をもっていると見なすべきことである。以下の議論で次第に明らかになるように、応答詞と主発話は発話の異なった位相に言及するものである。特に、先行研究 (定延 (2002), 串田 (2002), 森山 (2015) 等) では見落とされてきた応答詞の「そう」と主発話内の「そう」との関わりについては周到な考察が必要である。なお、(2B1)～(2B5) のような応答詞は顕在化せず、主発話のみから成る可能性もある。この場合には、事態を表す主発話の存在によって応答詞は前提にされていると解せる。

さらに、同種の応答詞には細かい使い分けがある (定延 (2002), 串田 (2002), 富樫 (2002) 等を参照)。例えば、肯定的応答詞には次のような容認度の差が見られる。

(3) [デパートの客と店員の会話]

A: カフェ F はこのフロアですか?

B: *うん／はい／? そう, そうです。

(4) A: 手伝ってくれる?

B: うん／はい／*そう。

(5) A: 今何時?

B: 2 時だよ。

A: *うん／?? はい／そう。

(3)には明らかに丁寧さが関わり、(4)には発語内行為による制限が関与し、(5)にはどのようにして得られた情報かの違いが反映している。

本論では、第一に応答詞と主発話内の「そう」の関わりについて検討し、第二に応答詞（主として肯定的応答詞）を河野（2011）の「関連性モダリティ」の枠組みによって分析し、第三に応答詞とイントネーションの相互交渉について検証し、第四に発話の形成と授受に関わる「〈好ましき〉の期待」の観点から肯定的応答詞と否定的応答詞のそれぞれに固有の語用論的機能を析出する。

1. 応答詞と主発話内の「そう」の位置づけ

まず始めに、応答詞は他の間投詞と同じ文中位置を占めることが確認できる。

(6) A: モーツァルトは交響曲を 41 曲も書いてるよ。

B1: うん／はい／そう, そうなんだ!

B2: あ／へえー, そうなんだ!

「あ」は事態に向けた感情の生起への〈気づき〉ないしは軽い〈驚き〉を伝え、「へえー」は事態への〈感心〉・〈詠嘆〉を表す。これに見合う応答詞は基本的に〈事態への話者の肯定的／否定的応答〉を表すものと規定できる（ただし、個々の応答詞の示差的特徴については今は伏せておく）。

(6B1) の応答詞の表示する〈事態への話者の肯定的応答〉は、具体的には相手の提示した情報を受容したことを表す。それでは、主発話はどのような事柄を表示するのであろうか。とりわけ問題にしたいのは「そう」の同定である。「そう」は「ヤンバルクイナは絶滅危惧種だし、トキもそうだ」や「酒は百薬の長だと言われるが、私もそう思う」のように語や節の代用形（照応形）として用いられるので、主発話内の「そう」もそのように見る向きが一般的である。しかし、よく見てみると、問題の「そう」はむしろ「本当」や「真（実）」と同義の叙述名詞とするのが究極的な特徴づけであるように思われる¹。このようにして、(6B1) の主発話の十全な表示は次のようになる。

(7) [[モーツァルトが交響曲を 41 曲も書いてること] がそうなんだと私は述べる]

ここで、「モーツァルトが交響曲を 41 曲も書いてること」は命題 P を表し、「そうなんだ」は（肯定的）真偽性判断を表し、さらに「私は述べる」は〈主張〉の発語内行為を表す²。簡潔に言えば、(7) は P の真偽性判断の主張を表している。この場合、注意しなければならないのは、話し手が P が真であると信じて真偽性判断を行っているか、それとも相手の主張をそのまま受け入れ、仮に P が真であるとして（あるいは P が真であるか否かにはコミットせずに）真偽性判断を行っているかを区別する必要性である。前者は相手の主張への「同意」であり、後者は相手の主張の単なる「受容」である。このように、「そうなんだ」は発話レベルで二重に曖昧になりうるが、どのような要素と共起するかによってどちらかの意味が決まる。(6B2) のように「あ」や「へえー」は典型的に「受容」を引き出す。一方、(6B1) を変形して次のような反復形にしてみると、今度は「同

意」を導く。

(8) うん／はい／そうそう、そうなんだ！

さらに、終助詞を付加した次の例を見て見よう。

(9) a. うん／はい／そう、そうなんだよ！

b. うん／はい／そう、そうなんだね！

明らかに、「よ」は「同意」を、「ね」は「受容」を導き出す。これは、「よ」が話し手の主張を提示することで発話内容が聞き手に関連性があることを伝え、「ね」は相手の主張を確認することで話し手と聞き手の双方に関連性があることを伝えるためである（河野（2011: 72）を参照）。

ここで、すでに（2B3）でも示したように、主発話の最も単純な形式は「そう」の一語発話であることに再び注意を向けたい。

(10) うん／はい／そう、そう！

(10)のように、前置きの応答詞と簡略化された主発話の「そう」が顕在する場合は問題ないが、いずれかが省略された場合には問題が生ずる。表層化した「そう」は応答詞なのか主発話の構成素なのか決めがたいからである。単独発話の「そう」はそもそもこのような内在的未決定性を孕んでいるのである。

2. 応答詞の関連性モダリティ

肯定的応答詞の「うん」・「はい」・「そう」は〈事態への話者の肯定的応答〉を表す機能を共有するが、個別の機能を合わせ持っている。以下その機能を明らかにしてみたい。

手始めに、次のような質問への応答の場合から観察してみたい。

(11) A：来週の月曜は祝日？

B：うん／はい／そう。

(12) A：[ケーキを食べている相手に] そのケーキおいしい？

B：うん／はい／*そう。

(11)は相手のみならず誰でも知りうる知識についての質問への応答であり、(12)は相手のみが経験者として知りうる知識についての質問への応答である。応答詞は(11B)では全て自然であるが、(12B)では「そう」は奇妙となる。さらに、「確認」の為の質問への応答の場合を見てみたい。

(13) A：[ケーキをおいしそうに食べている相手に] そのケーキおいしいのね？

B：うん／はい／そう。

この文脈では、「そう」も自然な応答となる。また、次のようなミニダイアログでの応答はどうだろうか。

(14) A：いつも何駅を利用してるの？

B：東西線の九段下駅だよ。

A：*うん／?? はい／そう。

(14)では、自分の質問への相手の答えに対する応答がなされている。この応答形はここでは全て下降調（F）のイントネーションを伴う場合としておくが、容認度に差が見られ、「そう」・「はい」・「うん」の順に容認度が低くなる。

以上の予備的な観察を踏まえて、三つの肯定的応答詞の特徴づけに迫りたい。まず第一に、「そう」は「うん」・「はい」と大きく対立しており、相手の判断を共有するか、ないしは共有しようと想定される場合には許容されるが、そうでない場合には排除される。(13)のように、相手の行動

(つまり考えの徴候)から推察して「そのケーキはおいしい(らしい)」という話し手の想定が形成されその当否を「確認」する場合には、応答の際に共有すべき想定が介在するが、(12)のように純粹に話し手個人の判断が求められている場合には相手と共有可能な想定は先在しない。これとは逆に、「うん」・「はい」は相手の判断を共有することが求められる場合には排除され、話し手の判断の提示が重要となる場合には許容される。したがって、(14)のように、自分の求めに応じて相手が提供してくれた情報を共有しない訳には行かない場合には「うん」・「はい」は極めて不自然なものとなり、(12)のような個人的な感想の開示では全く自然になる。

次に、「うん」と「はい」の差異に焦点を当ててみたい。次の例を見てみよう。

(15) *うん／はい、すぐに出かけるよ！

(16) *うん／はい、コーヒーどうぞ。

上のように、相手に注意を向けさせ、さらに行動への態勢を整えさせる意図の下では「はい」は良いが「うん」は不適格となる。「うん」は相手に働きかける力が弱く、内向的な響きをもつ。

もう少し敷衍して言えば、肯定的応答詞は共通して〈事態への話し手の肯定的反応〉を表示するが、「うん」は相手の情報を取りあえず受容し自分との関わりを吟味していることを表し、「はい」は自分の反応を相手に気づかせようとしていることを表すものである。さらに、「そう」は、自分の反応を相手と共有化しようとしている、ないしはすでに共有化していることを確認しようとしていることを表す。これらの応答詞の機能的差異を河野(2011)で提示した関連性モダリティ理論の枠組みの中に位置づけるとどうなるであろうか。すでに日本語の終助詞の証左が得られているように(河野(2011: 64-75))、発話はその情報内容が会話参加者の誰にとって関連的かを表し分けることがあるが、応答詞はまさにこの区別に関わるものである。なお、関連的な発話とは、コンテキスト効果が高く、課される処理努力が低い発話のことを言う(Sperber and Wilson (1986))。手取り早く言えば、実のある、ほどよく細工された発話を指す。こうして、「うん」は応答発話が「話し手に関連的」とであるとみなすのが適切であると判断できる。「うん」は、受動的ないしは内向的な姿勢を伴って、相手の情報の受容と自分との関わりを吟味に焦点が当てられているからである。「はい」は、対比的に、「聞き手に関連的」と規定できる。「はい」は「うん」のように反応を個人内に留めるように装うのではなく、むしろ積極的に自分の反応を相手に気づかせようと働きかける。残る「そう」は「話し手・聞き手に関連的」と見なしうる。「そう」は相手の働きかけを受け、自分の反応を相手と共有化しようとしていることを表すものだからである。まとめて提示すれば次のようになる³。

(17) 関連性の様態

i) うん：話し手に関連的

ii) はい：聞き手に関連的

iii) そう：話し手・聞き手に関連的

3. イントネーションによる応答のモード：「真摯さ」対「気軽さ」

ここでは、高下降調(F)と高平板調(L)のイントネーションに着目して応答詞の使い分けを観察して行きたい。高下降調(すなわち抑揚はゼロ形で語音調がそのまま実現したもの)を帯びる応答詞は真摯で思慮深い応答態度を表すものであり、高平板調は気軽に、軽く受け流す風な応答態度を表すものである。次の例を見てみたい。

(18) A：今何時？

B: 2時だよ。

A1: *うん／?? はい／そう [F]。

A2: うん／はい／*そう [L]。

応答詞が単独発話を成す上の例においては、Fは「そう」と適合するが他とは適合せず、一方Lは「そう」とは不適合であり他とは適合する。つまりはFとLは相補的に振舞っている。ここでのLは相手から情報を得たことへの形式的な（あるいは最低限の）反応を表しているように感じられる。この文脈でLが「そう」と馴染みにくいのは、「そう」のもつ情報共有化機能の提示の真剣さが安易には割り引けないためなのであろう。

面白いことに、応答詞が主発話を伴う場合には異なったパターンを示す。次の例で確認しておきたい。

(19) A: 今何時?

B: 2時だよ。

A1: *うん／?? はい／そう [F], そうなんだ。

A2: うん／はい／そう [L], そうなんだ。

Fの場合は、(19A1)は(18A1)と全く並行的である。ところが、Lの場合には(18A2)では「そう」は不適合を示していたが、(19A2)では問題はない。これは何を物語るものであろうか。おそらくは、ここでの「そう」は、主発話と共に起することで本来の情報共有化機能提示の役割がやや軽減されたからであろう。

今度は、相手から前触れもなく情報を提示された場合の応答を検討してみたい。次の例を見てみる。

(20) B: 分かてるの? もう2時だよ!

A1: うん／はい／そう [F]。

A2: うん／はい／*そう [L]。

深刻な結果を招くかもしれない事態を未然に回避するために提示してくれた情報は高い価値をもっている筈であり、通常は、(20A1)のように、どのような関連性のモードであれそれを真摯に受け取るであろう。しかし、(20A2)のように、深刻さをかわして、あえてカジュアルな態度で応答することもめずらしくない。ただし、この場合には、(18A2)と並行的に、「そう」は排除される。

次に、相手の独り言に話し手が自発的に応答した場合について検討してみたい。次の例を見てみたい。

(21) B: それって本当かな?

A1: うん／はい／そう [F]。

A2: *うん／*はい／そう [L]。

ここでは、Fについては(20A1)と同様の型を示すが、Lについては(20A2)と正反対の型を示す。(21B)は話し手自身の内的な疑念を言語化したものであり、相手の反応を半ば期待しつつも、積極的に応答を迫るものではない。これを受けた会話者はもちろん(21A1)の音調形で真摯に回答してやることは何ら問題はないが、(21A2)のように「そう」の気軽な「同意」の回答は起こりうるが、「うん」・「はい」のモードでは起こらない。ここでの気軽な「うん」・「はい」の回答では相手の発話との繋がりがあまりにも弱くなってしまうのであろうか。

今度は、丁寧さが関わる「真摯さ」・「気軽さ」の態度について述べておきたい。次の例を見てみよう。

(22) [デパートの客と店員の会話]

B：カフェ F はこのフロアですか？

A1：*うん／はい/*そう [F]

A2：*うん/*はい/*そう [L]

A3：*うん／はい/? そう [F]，そうです。

A4：*うん／はい/? そう [L]，そうです。

例が示すように、応答詞の単独発話の場合には、真摯さを表す F は「聞き手に関連的」な「はい」のみを許すが、気軽さを表す L はどのような応答詞も許さない。しかし、主発話と共に起す場合には、「はい」が F でも L でも許容され、「そう」もかろうじて許容される。何よりも店員は客の質問に真摯に答えることが求められる状況において、(22A1) の「はい」[F] はよいが (22A2) の「はい」[L] は不適格となる。一方、主発話を伴う場合には、それが実質的な客への丁寧な答えとなるので応答詞自体は気軽な態度でも無礼とはならないものと解釈出来る。

最後に、儀式化した応答の様相について検討しておく。次の例を参照してほしい。

(23) [教室で出席を取るやり取り]

B：天野さん。

A1：*うん／はい/*そう [F]。

A2：*うん／はい/*そう [L]。

ここでの応答は、自分が出席していることを相手に告知することが全てであるので、「聞き手に関連的」な「はい」のみが適切となる。教師への生徒の応答は丁寧でなければならないはずであるが、F のみならず L も許容されることは注目に値する。この場合の L は、気軽さの態度というよりむしろ個人的な感情を離れた儀式的ないしは事務的な発話態度を表していると言うべきであろう。

4. 応答の次元：「言語的受容」対「行為遂行の受諾」

〈申し出〉、〈提案・勧誘〉、〈依頼〉、〈助言〉、〈命令・禁止〉等の発話行為に接した場合の応答は興味深い生態を示す。手始めに、〈申し出〉への応答から検討して見たい。なお、この節での例は特に断らない限り全て音調形は高下降調 (F) であるとする。

i) 〈申し出〉

(24) B：ケーキ食べる？

A1：うん／はい/*そう。

A2：うん／はい／そう、後で食べる。

単独発話としての応答形は、(24A1) に見るように、「そう」が排除される。他方、(24A2) のように、今は申し出に従う行為は遂行しないが後で遂行する旨の発話が後続すると「そう」も受け入れ可能となる。その理由は、無限定の応答形は行為遂行を受諾したことを表すのに対して、限定された応答形はただ相手の申し出を言語的に受容したことを表すのみだからである。同様の現象を示す場合を列挙しておく。

ii) 〈提案・勧誘〉

(25) B：一緒に出かけようか？

A1：うん／はい/*そう。

A2：うん／はい／そう、ちょっと待ってね。

(26) B:一緒に出かけようよ。

A1:うん／はい／*そう。

A2:うん／はい／そう、ちょっと待ってね。

iii) 〈依頼〉

(27) B:手伝ってくれる？

A1:うん／はい／*そう。

A2:うん／はい／そう、できたらね。

iv) 〈助言〉

(28) B:すぐ始めた方がいいよ。

A1:うん／はい／*そう。

A2:うん／はい／そう、考えて見る。

v) 〈命令・禁止〉

(29) B:こっちに来なさい！

A1:うん／はい／*そう。

A2:うん／はい／そう、ちょっと待ってね。

(30) B:冷房を付けっぱなしにしないで！

A1:うん／はい／*そう。

A2:うん／はい／そう、もうちょっとしたら止めるね。

上例のそれぞれの A2 の応答では、発話時点で行為の遂行がペンディングにされており、場合によっては行為は未遂に終る可能性もある。それぞれの A1 の応答では行為の遂行を受諾したことになる。

ここで注意しておきたいのは、話し手の行為を促す発話行為であっても、直接発話行為と間接発話行為で応答の仕方に差異が生ずる場合があることである。例えば、先の (24) の直接的な〈申し出〉と対比的に、間接的な〈申し出〉は次のような現れとなる。

(31) B:ケーキあるよ。

A1:うん／はい／そう。

A2:うん／はい／そう、後で食べる。

(31A2) は (24A2) と同等で適格であるが、(31A1) では (24A1) の「そう」も適格となっている。(31A1) の応答は (31B) を直接発話行為である〈主張〉(事実の提示) に照準を合わせているように見える。

今までは相手の発話行為で要請された行為の受諾を表す肯定的応答詞について述べて来たが、今度は行為の拒絶を表す否定的応答詞について検討する。現象は〈申し出〉と〈依頼〉で代表しておく。なお、音調形は下降調 (F) に加えて上昇調 (R) も観察する。

i) 〈申し出〉

(32) B:ケーキ食べる？

A1:*うん／いいえ／いや [F]。

A2:うん／いいえ／いや [R]。

iii) 〈依頼〉

(33) B: 手伝ってくれる?

A1: *ううん / *いいえ / *いや [F]。

A2: *ううん / *いいえ / *いや [R]。

音調形を詳細に述べれば、下降調では「ううん (HLL)」、「いいえ (LHH)」、「いや (HL; LH)」となり、上昇調では「ううん (HLH)」、「いいえ (LHH⁺)」、「いや (HLH; LHH⁺)」となる (ただし、L は低、H は高、H⁺ は超高ピッチを表すものとする) (河野 (2015) を参照)。注目されるのは、肯定的応答詞との生起パターンの異なりである。〈申し出〉の F の応答では「そう」は不可であったが「いや」は可であり、逆に「うん」は可、「ううん」は不可となる。「はい」と「いいえ」は共に許容される。しかしながら、R の応答では全てが生起可能となる。(〈提案〉・〈勧誘〉、〈助言〉、〈命令〉・〈禁止〉も同様にふるまう。) イントネーションは河野 (2011) の関連性モダリティの枠組みでは「関連性判断」・「関連性意識の判断」を表すものと見なされる。「うん」・「はい」・「そう」に対応して「ううん」・「いいえ」・「いや」は順に否定的応答が「話し手に関連的」・「聞き手に関連的」・「話し手・聞き手に関連的」であることを表示する。(17) で示した応答詞の関連性の様態は全体として次のようなものとなる。

(34) 関連性の様態

- i) うん・ううん: 話し手に関連的
- ii) はい・いいえ: 聞き手に関連的
- iii) そう・いや: 話し手・聞き手に関連的

この様態が組み込まれ、F は「関連性判断」の〈主張〉を表し、R は「関連性意識の判断」の〈質問〉を表す。最終的な関連性モダリティのモードは次のようなものとなる。

(35) 否定的応答詞の関連性モダリティ

A. 関連性判断の〈主張〉: 下降調

- i) ううん [F]: 私は、この否定的応答が〈話し手に関連的〉であるとあなたに述べます。
- ii) いいえ [F]: 私は、この否定的応答が〈聞き手に関連的〉であるとあなたに述べます。
- iii) いや [F]: 私は、この否定的応答が〈話し手・聞き手に関連的〉であるとあなたに述べます。

B. 関連性意識の判断の〈質問〉: 上昇調

- iv) ううん [R]: 私は、この否定的応答が〈話し手に関連的〉であることにあなたが気づいているかどうかあなたに尋ねます。
- v) いいえ [R]: 私は、この否定的応答が〈聞き手に関連的〉であることにあなたが気づいているかどうかあなたに尋ねます。
- vi) いや [R]: 私は、この否定的応答が〈話し手・聞き手に関連的〉であることにあなたが気づいているかどうかあなたに尋ねます。

以上〈申し出〉の生起の様態を見たが、(33) が示すように、〈依頼〉への否定的応答詞は完全に排除される。この場合は、抑揚の不適合というより、そもそも否定的応答が許容されないからである。応答詞は丁寧さの要請から「すみません」のような謝罪表現が取って代わることになる。

5. 応答と「関連性」の度合い

ここでは、応答が「関連性」の度合いの作用を受ける現象を追ってみたい。始めに、既知情報・

未知情報が相づちにどのように影響するかについて検討してみる。次の例に目を向けよう。なお、以下では、PP は音韻句境界、つまり区切りを表す。

(36) [紀尾井ホールが A にとって未知情報の場合]

B: 今秋の T リサイタルの開場は紀尾井ホール [PP1], 紀尾井ホールは [PP2] ホテル
ニューオータニのすぐそば [PP3]。

A: PP1 うん／はい／そう

PP2 うん／はい／*そう

PP3 ??うん／はい／そう

(37) [紀尾井ホールが A にとって既知情報の場合]

A: PP1 うん／はい／そう

PP2 うん／はい／*そう

PP3 うん／はい／*そう

(36B)は PP1 を境にした等位構造を成す発話である。発話の前半は「紀尾井ホール」の既知・未知に関わらず「X は Y である」と言う指定文としての新情報を含んでいると見なされ、PP1 では(36A)も(37A)も全ての応答形を許す。また、後半発話の主題の終端に位置する PP2 では(36A)も(37A)も「そう」のみが排除される。PP3 は後半発話の題述の終端であると同時に後半発話、全発話の終端でもあるが、「紀尾井ホール」の既知・未知が反映し、(36A)では「うん」が不自然となり、(37A)では「そう」が奇妙となる。後半発話は話し手が相手の知識状態に配慮して念のため提供した補足情報を表している。聞き手はこのような気遣いに報いるようその情報が実際に関連性の高いものであったか否かを表明する必要がある。未知情報の場合には、(36A)のような「話し手に関連的」な「うん」では情報価の判定は過小であり、逆に既知情報の場合には(37A)のような「話し手・聞き手に関連的」な「そう」では情報価の判定は過大であろう⁴。

ここまでは相手の情報を「受容」する応答について考察したが、「同意」の応答はどうであろうか。次の例で確かめたい。

(38) A: PP3 うん／はい／そう、知ってるよ。

既知情報をそれとして明示する主発話を伴うと、(37A)とは異なり、「そう」も「同意」として容認される。

(36A)[PP3]のような新情報への応答と関連づけて、先の(18A1)と(20A1)をそれぞれ(39A1)、(40A1)として再度検討してみたい。

(39) A: 今何時?

B: 2 時だよ。

A1: *うん／?? はい／そう [F]。

(40) B: 分かっているの? もう 2 時だよ!

A1: うん／はい／そう [F]。

興味深いのは、同様に新情報に接しているにも関わらず、応答は異なるパターンを示していることである。そこで、応答者が相手の提供した新情報をどのように査定しているものと想定されるかに注目してみたい。(39)では、自分の質問に対する答えであって、最も関連性の高い(つまり情報価の高い)情報であることは疑いない。この場合、応答者は相手の情報をたった今共有されたものとして真摯に受容する以外にはすべはない。(40)では、相手は関連性の高さを確信してはいるが、受け手の評価は目算通りとは行かないことが十分ありうる。もちろん重要な情報であると判定される場合もある。しかし、例えば、その時刻はうすうす気づかれていたかもしれず、あるいはたとえそ

の時刻がそうだとした場合の事態に於いて重要な影響を与えないかもしれないからである。したがって、関連性の評価に見合った受け止め方で三通りのいずれかの応答がなされる。三形式の全てが許容されるのは、新情報への応答として無標の場合であると考えられる ((36A)の PP1 も参照のこと)。残るもう一つの応答パターンである (36A) [PP3] については、新情報が必要以上に提示されていることに重点がある。応答の対象である (36B) では、発話の前半 [PP1] が主要な情報内容であり、後半は相手の便宜を考えての補足的な情報内容となっている。後半の情報内容は相手にとって未知かもしれないし既知かもしれない。応答者は、それが既知の場合には無視しても差し支えないが、未知の場合には有用な情報の恩恵に浴したことを積極的に表明する必要があるであろう。この時、そのような情報の受容を個人内の関わりとしてどちらかと言えば消極的態度で応答することは好ましくないであろう。これが「話者に関連的」な「うん」を不自然に聞こえさせる理由である。

6. 応答と〈好ましき〉の期待

発話の生成と授受には様々な位相で作用する〈好ましき〉の期待が介在し、応答詞はそれに呼応する (河野 (2016) を参照)。以下、発話行為、談話管理、発話の表示、事態のそれぞれに伴う〈好ましき〉の期待と応答について検討する。

6.1 発話行為の〈好ましき〉の期待

発話行為には、発話の授受に関わる〈好ましき〉の期待が関与する。4 節で取り上げた〈申し出〉、〈提案・勧誘〉、〈依頼〉、〈助言〉、〈命令・禁止〉等の発話行為への応答は、行為遂行の受諾・拒絶を表していると同時に「〈好ましき〉の期待」の判断も行っていると見なせる。次の〈申し出〉と〈依頼〉の例で検証しておく。

(35) B: ケーキ食べる? 〈申し出〉

A1: うん／はい／*そう [F]。

A2: *うん／いいえ／いや [F]。

(36) B: 手伝ってくれる? 〈依頼〉

A1: うん／はい／*そう [F]。

A2: *うん／*いいえ／*いや [F]。

(35A1, A2) も (36A1, A2) も一見真偽性判断を下しているように見えるが、実際は行為遂行の可否を伝えている。〈申し出〉は相手の利益のために話し手が何らかの負担を負う行為であり、〈依頼〉は逆に話し手の利益のために相手に何らかの負担を課す行為である。これらの働きかけを受けた場合には、受諾するのが儀礼にかなっており、拒絶は極力避けられる (Levinson (1983: 336) を参照)。つまりは、受諾は丁寧さに関わる「〈好ましき〉の期待」を満たしていることの表明であり、拒絶はそのような期待を満たしていない旨の表明である。〈提案・勧誘〉、〈助言〉、〈命令・禁止〉の場合も全く同様である。

6.2 談話管理の〈好ましき〉の期待

i) wh 疑問文への応答

ここでは、最初に相手の質問への応答としての「うん」「はい」「そう」の生態を捉えてみたい。応答は相手の質問が yes-no 疑問文か wh 疑問文かによって異なる。すでに (1), (3), (11), (12) で観察したように、yes-no 疑問文への応答は真偽性判断としての肯定・否定を表す。ところ

が、wh 疑問文への応答は wh の値を指定することが期待されているのであり、もちろん真偽性判断は関与しない。では、そのような応答は何を表示しているのであろうか。次の例を検討してみたい。

(33) B: これは何ですか?

A: うん／はい／そう、印刷をする機械です。

(34) B: 何時に出発する?

A: うん／はい／そう、8 時ぐらいでいいんじゃない。

(なお、(33), (34)は富樫 (2002: 136) に必要な補足と改変を加えたものである。) これらの wh 疑問文への実質的な答えはそれぞれの主発話で提示されている。それでは、応答詞はどのような答えとは直接関わらないどのような成分を表しているのであろうか。富樫 (2002: 136) は「うん」と「はい」が「相手の発話に対する何らかの反応」を表すとしているだけであるが、もう少し本質に迫ってみたい。これらの応答は相手の質問を受容したことを告げていることは確かである。さらには、相手の質問がこの場で壺にはまった（つまり十分関連的な）発話であるという判定も含まれているであろう。質問は共に同じ関心をもつ状況についての適切な認識に到達するための一プロセスであるはずだからである。そのように位置づけられた相手の質問を受容し、三様の応答を投げ返すのは発話のやり取りの観点から〈好ましい〉ことであると言える。質問者の意図を汲んで、真摯にかつ友好的に返答してやることは会話の作法にかなうことである。このように考えると、肯定的応答詞「うん」・「はい」・「そう」は談話管理に関する「〈好ましき〉の期待」が充足していることを表す標識であると規定できる。なお、対を成す否定的応答詞「ううん」・「いいえ」・「いや」は原理的に「〈好ましき〉の期待」が充足していないことを表す標識であるはずであるが、問題の文脈では生起不可能となっている。

ii) 発話の促し

今度は、突然話しかけられてそれに應對する場合を見てみよう。

(37) B: すみません。

A: *うん／はい/*そう。何でしょうか?

相手は自分の用件を切り出すためにまずは会話の成立を望んでいるのであり、聞き手はその望みを受け取り、相手の発話を促している場面である。このような協調的な応答は、明らかに談話管理の観点からも丁寧さの観点からも「〈好ましき〉の期待」に沿うものである。このような応答はとりわけ相手にとって重要性をもつので、「聞き手に関連的」な「はい」がふさわしい形式となる。

iii) 相づち・話題の展開

さらには、相づちも同種の現象であると考えられる。次の例で確かめておく。

(38) B: きのはね、

A1: うん／はい/*そう、

B: 私の誕生日だったの。

A2: うん／はい／そう。

相づちは相手の語りに同調し、さらに語りを展開させるように促す合図である。(37)のような突然話しかけられる場合とは異なり、会話は（ほんの少し前であれ）すでに確立している。相づちも相手の発話を促しているのであるが、それは話題のさらなる展開のためである。会話の参加者が協調して語りを紡いで行くことは疑いもなく「〈好ましき〉の期待」を満たすことである。肯定的応答

詞はその標識となる⁵。ただし、「そう」は一つの命題を成さない発話断片の応答としては不適格となることに注意しておきたい。

相づちは、実は自分の発話に向けてなされることがある。

(39) a. きのは私の誕生日だったの、うん／はい／そう。

b. うん／はい／そう、きのは私の誕生日だったの。

相づちは発話に続いて起こるのみではなく、発話を先取りしても起こる。タイミングに関わらず、その役割は自分の語りを展開させることにある⁶。また、明確な相づちとはなっていないなくても、次のような場合も基本的には同じ機能をもつと見なせる。

(40) A: あなたちょっとしてテニスしますか?

B: ええ、たまには。以前はよくやってましたが。

A: うん／はい／そう、私テニスが好きなんですね。

ここでは、共通の関心事を模索する中で自分が持ち出したテニスの話題を何とか広げようとしていることが見て取れる。応答詞は首尾よい会話であることの認定（ないしはそのようにしたい望み）を表すものである。

6.3 発話表示の〈好ましき〉の期待

i) 「ふざけ」発話から「まじめ」発話への切り替え

ここでは、「ふざけ」発話から「まじめ」発話への切り替え点に生起する否定的応答詞に注目してみたい（Schegloff (2001) を参照）。次のような例においてである。

(41) B: あいつは人の仕事はどうせ気に入らないんだから、いっそ仕事を全部まかせるべきだよ。

A: *うん／*いいえ／いや、冗談じゃなしに、仕事をもっと増やそうか。

応答詞は、相手のいささか勢いに乗じたふざけ発話からまじめ発話にスタイルを転換する装置になっている。ふざけに水を差すのは発話の〈好ましき〉の期待に逆らうものであり、応答者はそれを口惜しく思っているのである。

ii) 誤解・不一致の処理

日常の会話のやり取りにおいて、不本意ながら理解の齟齬をきたすことがある。そのような場合には早めに誤解を正し、軌道修正を図らなければならない（Schegloff et al. (1977) を参照）。その有効な手段となるのが否定的応答詞である。

(42) B: 結局私の提案はちょっとずれてるってことかな？

A: ううん／いいえ／いや、そうじゃなくて、私はあなたの提案には賛成してるんです。

応答詞は相手の間違った解釈を斥けているのであるが、その根底にはそもそも誤解が生じてしまっていることが発話のやりとりの〈好ましき〉の条件に合致しないことの認識がある。

iii) 言い直し

誤解は他者の考えの間違った表示を対象にするが、言い直し (repair) は自分の考えの不適切な表示を立て直そうとするものである。

(43) 彼はあの曲の作曲者、*うん／*いいえ／いや編曲者です。

不適切な表示は、「すべからく発話が意を尽くすべきものであること」といった関連性の基本原則（Sperber and Wilson (1986) の Presumption of Optimal Relevance）に関わる〈好ましき〉の

期待に沿えなかったことの感慨を表すものである。

iv) 強調

見かけは言い直しに類似しているが、それとは全く作用を異にする強調のための言い換えがある。次の例がそれを示す。

(44) それは完成するのに 10 年、うん／はい／そう、たっぷり 10 年かかった。
ここに介在する強調は話し手の考えのコンテキスト効果（平たく言えばインパクト）を高めるためである。「10 年」を「たっぷり 10 年」と言い換えることで歳月の長さがより強く印象づけられる。発話が表現効果を高める方向で進んでいるのは〈好ましさ〉の期待を満たすものである。

v) 主張の根拠とアイロニー

発話の主張の根拠の適格性に関わる応答詞がある。また、応答は額面通りのものかアイロニーが加わったものかによって分かれる。次の例を見てみたい。

(45) B：彼女はきっと 50 歳近いよ。

A：*うん／*いいえ／いや、まさか。冗談でしょう。

(46) B：私と彼女の間には何もないよ。いい友達だけ。

A：うん／はい／そう、そうなのかな？

(45)では、相手が提示した話題の女性の年齢判断に対して、その判断と根拠が妥当性を欠いていて受け入れがたいことを伝えている。相手の主張とその根拠は、少なくとも自分の判断基準による限り、発話の適格性に求められる〈好ましさ〉の期待を充足させていないことになり、「いや」が出現する。一方、(46A)のようなアイロニー発話は相手の考えがばかばかしいものであることをフィードバックするものである。表面的には相手の主張を支持しながら、実はその主張の妥当性について疑義を唱える修辞法である。相手の主張と根拠を共有できている事は良いことである。さらには、相手の主張を支持すること（あるいは少なくとも理由なく反対しないこと）は会話のマナーに沿うことでもある（Leech (1983: 138) を参照）。したがって、肯定的応答詞は、あくまで見せかけにはあるが、当該の発話が主張内容とマナーの観点からの〈好ましさ〉の期待を満たしていることを伝えている。

6.4 事態の〈好ましさ〉の期待

ことばは、我々が生きている外界を投影する。ことばが表象する事態は、人間存在にとって恩恵や脅威を与え、幸福や不幸をもたらすのが常である。事態が歓迎すべき物か否かはしばしば応答詞で言及される。次の例を見てみたい。

(47) 傘どこに置いたんだっけ？うん／はい／そう、そうだった。車の中だった。

(48) うん／はい／そう、やったぞ！中田がまた得点を入れたぞ。

(49) *うん／*いいえ／いや、まずい！財布をなくしちゃった。

(50) *うん／*いいえ／いや、リイちゃんだめ！スイッチ触らないで。

(47)は失念していた事を幸い思い出した場合である。(48)は選手の快挙への共感の感嘆を伝えている。(49)は価値ある物の紛失に気づいて落胆している場合である。さらに、(50)は好ましくない事態を回避するための禁止を表明する場合である。このように、〈好ましさ〉の期待を満たす事態は肯定的応答詞によって、それを満たさない事態は否定的応答詞によって主観的に言語化されることが見てとれる。

7. 結論

本論で明らかにしたのは次のようなことである。第一に、従来曖昧に記述されて来た「そう」を、本来的な応答詞の「そう」と主発話内の真偽性判断に関与する「そう」に分け、応答詞に固有の特性を析出した。第二に、応答詞は関連性モダリティを表し分け、「うん」・「ううん」は〈話し手に関連的〉、「はい」・「いいえ」は〈聞き手に関連的〉、「そう」・「いや」は〈話し手・聞き手に関連的〉であると規定した。第三に、応答詞とイントネーションとの関わりを考察し、「関連性判断」・「関連性意識の判断」の〈主張〉（下降調）や〈質問〉（上昇調）が応答詞に作用することを実証した。さらには下降調と平板調のもとらす「真摯さ」対「気軽さ」の発話態度についても触れた。第四に、応答の様態として「言語的受容」対「行為遂行の受諾」の区別や、関連性の度合いの差異を論証した。第五に、応答詞には発話の生成と授受の様々な位相で作用する〈好ましさ〉の期待が介在し、肯定的応答詞は〈好ましさ〉の期待が充足していることを表し、否定的応答詞は〈好ましさ〉の期待が充足していないことを表すことをつぶさに検証した。

応答詞に内在する関連性モダリティのモードは終助詞「わ」・「よ」・「ね」に比肩するものであり、日本語の極めて重要な認知的基盤を成すものであると判断される。このような認知のあり方は、さらに日本語のダイクシスとも相同すると言えるかもしれない。「こ」・「そ」・「あ」は「話し手」・「聞き手」・「話し手・聞き手」を基点にした事物の指示（同定）であり、情報の関連性領域を指定する関連性モダリティとの深いレベルでの相通性が感じられるからである。

肯定的応答詞と否定的応答詞が表示し分ける〈好ましさ〉の期待の充足・非充足は、類型を異にする英語の yes/no にもほぼそっくり当てはまる（河野（2016）を参照）。応答詞は、言語普遍的に、事態の真偽性判断と〈好ましさ〉の価値判断の両方にまたがる領域をカバーするものであると言える。

《注》

- 1 定延（2002）は感動詞の「そう」と「うん」の相違に着目し、「そう」は照応詞の「そう」と繋がっており、「希薄化された照応詞の意味『先行文脈への言及』が残存している」（p.95）のに対して「うん」はむしろ「うめき・うなり・りきみ・せきばらいといった非言語的な『うん』とむすびついて」おり、「希薄ながら意味があるとする根拠は見当あたらない」（p.109）としている。しかしながら、このような特徴づけは、純然たる応答詞と主発話内の「そう」とを区別していないことに起因すると思われる。次のような発話の図式を見てみよう。

i) うん／はい／そう、そうです。

本論では主発話内の「そう」は「Pはそうです」のような叙述名詞と見なすので、そもそも照応詞とは考えてはいないが、仮に照応詞だとしても応答詞の「そう」に際立って照応詞の意味が残っているかどうか疑問であると言わざるをえない。応答詞は性質上全て先行する相手の発話や考えへの応答を表すものであり、それをもって照応的とするならば、応答詞の照応性の度合いに相違があるとは認めがたい。なお、一語発話の「そう」は応答詞なのか主発話の省略形なのか曖昧になるが、後者の場合は定延の観点からは照応的となる。また、さらに言えば、定延は「そう」と「うん」の相違を強調するあまり、同一の現象に異なった記述ラベルを割り振り、両者が応答詞としての共通の特性をもつことを公平に捉えていない。

- 2 主発話内の「そう」を真偽性に関与する叙述名詞と見なすと、「応答詞＋主発話」の構造は英語等とも並行するものであることが確認できる。

i) A: Mozart wrote as many as 41 symphonies.

B: Yes, he did.

主発話は(7)と全く並行的に次のように表示できる。

ii) I say it is the case [that Mozart wrote as many as 41 symphonies]

これは明らかに相手の発話の真偽性判断の〈主張〉を表すものである。

- 3 串田 (2002) は「引き取り」発話 (すなわち割り込み発話) に後続する「そう」と「うん」に焦点を当てている。なお、以下の表示は筆者が適宜修正したものである。

i) B: ちょうどえんどうえんどうえんどう豆のねー 出始めでね ー
 A: うんきせ ーそう
 そう ーそう一番おいしいときやったねー
 B: うん

(串田 (2002: 23))

ii) B: 結局このトマトほとんど 食べたねー うん
 A: 食べちゃったね ー
 B: まるまる

(ibid., p. 27)

このような事象を踏まえ、「そう」と「うん」について次のような仮説を提案している。

iii) 仮説 1

「そう」とは、直前の相手の発話が、自分の発話計画に対して独自の貢献をしたことを認定するために利用可能な道具である。この道具を用いることで、相手の発話は、「自分の計画に沿うものの自分では十分な形で言わなかったこと」を「代弁」したものとして認定される。それゆえに「そう」は、相手の貢献を自分の発話計画に組み入れる形でさらに発話を継続しようとするときに、その前置きとして利用できる。(ibid., p. 23))

iv) 仮説 2

「うん」とは、相手の直前の発話を、自分の先行発話への「相手の理解を示すもの」として「聞き留めた」ことを主張するために利用可能な手続である。ゆえにそれは、「相手が示した理解」を「承認」するときにも、「相手が示した理解」を「否認」しつつ自分の発話計画を先に進めようとするときにも利用できる。(ibid., p. 30)

要するに、「そう」は応答の対象となる相手の発話が現時の、そして今後の談話の形成にとって重要性をもつことを表示するものであり、これは相手の発話が「話し手と聞き手の双方に関連的」であるといえることができる。「そう」は交わされつつある情報の共有化に力点が置かれているのである。一方、「うん」は相手の発話の重要性を目下吟味中であることを表示しており、これは相手の発話が(とりわけ)「話し手に関連的」であると読み替えることができる。「うん」は何よりも自分のために情報を活用しようとする姿勢を表していると思われる。総じて、串田の見解は本論の関連性モダリティによる説明と実質的に軌を一にするものであると言える。

- 4 富樫 (2002) は、「はい」と「うん」の使い分けは話し手の認知状態に依存すると述べている。依拠する事実は次のようなものである。

i) (飲み会の場所を教える。B が「白木屋」という店を知らない場合)

A: 白木屋に 6 時、白木屋ってのは大通りの角にある居酒屋。
 B: うん うん ?うん
 ??はい ?はい はい

ii) (B が「白木屋」という店を知っている場合)

A: 白木屋に 6 時、白木屋ってのは大通りの角にある居酒屋。
 B: はい うん うん

富樫 (2002: 133)

富樫の結論は「話し手にとって情報がまだ不足しているポイントでは「うん」、充足したポイントでは「はい」が用いられる」(p. 133) となっているが、問題を残している。まず、事実の判断について、i B) の三つの「はい」には容認可能性に差は認めがたい。相手の情報をそのまま素直に受容する返答として何ら不自然さはない。さらに、説明が破綻していると思われるのは、ii B) において「白木屋」の既知情報のおかげで「白木屋に 6 時」という発話の提示を受けた段階で問題の情報は「充足した」ことになるはず

なので「はい」の応答は許容されると見なせるであろうが、既知情報である余剰な後続発話においてなお「情報がまだ不足している」ことを表示する「うん」が生起しうるのはなぜかである。事實は、「はい」は情報の不足・充足（未知情報・既知情報）には敏感ではなく、「うん」は本論で述べたある種の未知情報の受容の仕方に敏感であるとすべきである。

5 日本語の相づちのイントネーション形は常に下降調であり、上昇調となることはない。英語の場合には、下降調も用いられるが、上昇調が普通である（O'Connor and Arnold (1973: 57) を参照）。通言語的に、下降調は話し手による「関連性の主張（認定）」の表示であり、上昇調は聞き手への「関連性意識の質問（促し）」の表示であるが、どちらのモードで相手の発話に同調するかは言語習慣の差が見られるのは興味深い。

6 田窪・金水（1997）は感動詞・応答詞を「対話処理操作の心的モニター」と特徴づけ、応答詞「はい」・「ええ」は文頭では「相手の発話を入力した承認（acknowledgement）の標識」（p. 264）であり、文末では「相手に対して出力したことの承認の標識」（ibid.）であるとしている。特に、文末の例として次のような発話を挙げている。

i) 以上が、本日の報告です、はい。（田窪・金水（1997: 265））

この種の発話は「こちらの出力が終わったので、そちらでの処理に移られたい」（ibid.）という信号になるとする。しかしながら、「はい」が i) のような一連の発話を締めくくる位置に現れた場合には問題はないかもしれないが、一連の発話の導入部分に現れた（39a）のような場合にはむしろ「出力の継続」を表示すると見なすべきであろう。応答詞には単なる入出力の切り替えスイッチ以上の機能が備わっていることは明らかである。

参考文献

- Ameka, Felix (1992) 'Interjections: The Universal Yet Neglected Part of Speech,' *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.
- Bolinger, Dwight (1989) *Intonation and Its Uses*, Stanford University Press, Stanford.
- 富樫純一（2002）『「はい」と「うん」の関係をめぐって』、定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』、127-157、ひつじ書房、東京。
- Goffman, Erving (1981) *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- 河野武（2011）『関連性モダリティの事象：イントネーションと構文』開拓社、東京。
- 河野武（2013）『「のだ」の本性は真偽性・関連性モダリティなのだ』、『大妻レヴュー』46, 43-59。
- 河野武（2015）「日本語イントネーションにおける上昇調の表示」、『大妻女子大学紀要（文系）』47, 1-14。
- 河野武（2016）「Yes と No :『〈好ましき〉の期待』の充足・非充足」、『大妻レヴュー』49, 57-72。
- 河野武（近刊）「ことばと感情：英語の間投詞」、高見健一他（編）『中島平三先生退職記念刊行物』開拓社、東京。
- 串田秀也（2002）「会話中の『うん』と『そう』——話者性の交渉との関わりで」、定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』、5-46、ひつじ書房、東京。
- Leech, Geoffrey. (1983) *The Principle of Pragmatics*, Longman, London.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 森山卓郎（2015）「感動詞と応答」、友定賢治（編）『感動詞の言語学』、53-81、ひつじ書房、東京。
- Norricks, Neal R. (2007) 'Interjections as Pragmatic Markers,' *Journal of Pragmatics* 41, 866-891.
- 定延利之（2002）『「うん」と「そう」に意味はあるか』、定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』、75-112、ひつじ書房、東京。
- Schegloff, Emanuel A. (2001) 'Getting Serious: Joke → Serious 'No',' *Journal of Pragmatics* 33, 1947-1955.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson and Harvey Sacks (1977) 'The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation,' *Language* 53, 361-382.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」、音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版、東京。